統一医学の定立とその展開

～医学的見地からみた絶対「性」について

鈴木重裕　M.D., Ph.D.

＜序論＞

統一医学とは、真の愛、真の生命、真の血統を実践し実現するための医学であるといえる。それはレバレント・ムーン(1920～)による統一思想、即ち「神主義」に基づいている。統一医学の目的は、人類一家族の理念を実施するのと同時に、人間を苦しめるあらゆる病気を根本的に治すことによって、永遠なる神の愛の理想世界を実現しようとするところにある。

ところで、今日、先進諸国を始めとして、男性と女性が簡単に結婚しては離婚するというような状況となっており、結婚の神聖性や永遠性が失われている。しかしこれは本来の夫婦の姿ではない。男性と女性はなぜ存在するのか、結婚は何のためにするのかという根源的な問題、あるいは「性」に関わる様々な病気に対して、現代医学は未だ有効な解決策を打ち出せずにいるのである。

そこで今回、「性」について医学的見地から検討を加え、統一医学の定立と展開において、究極的な重要テーマである絶対「性」について述べてみたいと思う。

＜本論＞

まず明らかなことは、この宇宙はすべてがペア・システムになっており、男性と女性の間にはお互いに引き合う目に見えない強い力が存在しているという事実である。それを裏付けるような最近の研究がある。

Coan らは、「脅威にさらされた女性は、知らない人ではなく夫の手を握ったときに最も安心する。さらに、その安静効果が最も高かったのは、結婚生活の満足度が最も高い夫婦であった」との研究結果を発表したのである。これは、脅威にさらされた状態で他人から身体に触れられたことに対する神経学的反応を調べた初の研究であるが、これは夫婦という「性」を介した親密な人間関係によって健康が増進されるという特性を、脳がどのようにして促進するのかを調べた初の研究でもある。

この研究結果は、結婚生活に大いに満足していると自己申告した夫婦１６組のデータから得られたものである。まず被験女性に対して、脳 MRI スキャン中に極めて弱い電気ショックによる脅威が与えられた。脳スキャンは、①夫の手

を握った状態、②知らない男性の手を握った状態、③誰の手も握らない状態、で行った。被験者の脅威に対する神経反応が最も大幅に低下したのは、夫の手を握ったときであった。知らない男性の手を握ったときの安静効果は、それよりも低かったのである。これらの安静効果は、誰の手も握らない状態と比較したものであった。さらに、予期しなかった知見ではあるが、結婚生活がうまくいっているケースほど安静効果が高いことがわかったのである。即ち、結婚生活の満足度が最も高い夫婦は、MRI スキャン中の安静効果が最も高く、痛みの処理をつかさどる神経回路の情動的要素の活性も大幅に低下していたのである(Coan et. al., 2006)。

また、結婚生活の満足度が循環器系、内分泌系、免疫系を中心とした間脳機能に変化を与え、有病率や死亡率にまで影響を与えるという研究は多い(Kiecolt-Glaser et. al., 2003; Robles et. al., 2006)。特に、うっ血性心不全の死亡率に関する研究でも同様な結果が報告された。その内容は、配偶者の特別な情的な支えが、うつ状態の改善により重要な役割を果たしていたという事実である。これは、人間の生活の質(QOL) を高めるには「社会的な支え」が必要であるが、配偶者の支えは、それ以上に、生活の質だけではなく、人生の意味そのものまでも変えるほどの強い影響力を持っているということを示している(Luttik, 2005)。

このように夫婦関係は、様々な人間関係の中でも「性」を介する唯一で特別な相対関係であり、結婚生活の満足度が高ければ高いほど、人は人生の完成度を高めていくことができるのである。それはなぜだろうか？そして「性」の本質とは一体何であろうか？

「原理講論」には、「神は陽性と陰性の二性性相の中和的主体」であると書かれており(DP, p.25)、統一思想では、性相と形状の他に陽性と陰性も神の二性性相である、としている。これは、神の性相は陽性と陰性の属性を持ち、神の形状も陽性と陰性の属性を持っている、という意味である。言い換えれば、神の性相と形状は、各々陽的および陰的な特徴を現すことのできる可能性を持っていることを意味している。従って陽性・陰性の二性性相は性相・形状の二性性相とは次元が異なるのである。即ち、原相において性相・形状は一次的な属性であり。陽性・陰性は二次的な属性なのである(UT, p.11)。それではなぜ、性相・形状の属性の他に陽性・陰性の属性があるのだろうか？

統一思想ではさらに次のように述べている。それは、創造において変化と調和を現すためであり、美を現すためであるという。例えば、明晰と模糊、興奮と沈着、積極的と消極的などという変化を通して調和しているときに美が現れるのである。性相・形状だけでは、創造に際して、被造物に変化や多様性の調和を賦与することはできないのである(UT, p.12)。

ところで東洋医学では、東洋哲学に基づき万物はすべて陰と陽から構成されていると見て、陰陽についても論じてきた。しかし東洋哲学の陰陽観には曖昧で不明な点がある。それは陽と陰をある場合には実体として扱い、またある場合には属性として扱っているということである。例えば、太陽、男性、峰などの実体も、明るさ、熱さ、高さなどの性質も共に陽であるとしており、また一方、月、女性、谷などの実体も、暗さ、冷たさ、低さなどの性質も、共に陰であるとしている。しかしながら、統一思想から見れば、陽性と陰性は実体ではなく属性でしかありえない。例えば、男性は陽そのものの実体ではなく女性も陰そのものの実体ではないのである(UT, p.12 - 13)。

言い換えれば、男性も女性も、性相と形状（心と体）を持った実体であって、それが一方においては陽性を帯びており、他方においては陰性を帯びているのである。つまり男性は陽的な性相・形状の実体（陽性実体）であり、女性は陰的な性相・形状の実体（陰性実体）なのである。それは即ち、形状面においては、男性も女性も陽的要素と陰的要素を持っているが、男性は陽的要素をより多く備え、女性は陰的要素をより多く備えているのであり、これは量的な差異であるということができる。性相面においては、男性も女性も陽的要素と陰的要素を持っているが、その陽陰に質的な差異があるために、男は男らしさ、女は女らしさを本性として備えているのである(UT, p.13)。従って、「性」とは生物学的要素に根ざしながら、陽陰の属性の量的、質的差異によって本性として備えられたものであり、環境と経験によって「性」が後天的に作られたものではない。それでは、いかにして性差が現れるのであろうか？次の２つの観点から述べてみたい。

第一に、発生学、遺伝子学の観点からみると、人間の性染色体による性別はＹ染色体の有無によって決まる。まれに、真性半陰陽のように性染色体が XX と XY のモザイクになっている人もいるが、基本的には X 染色体の数には左右されない。性腺は中胚葉の一部である中間中胚葉から発生してくるが、これは精巣にも卵巣にも分化できる能力を備えている。胎生の初期に Y 染色体上にある性決定遺伝子（Sex-determining Region of Chromosome Y: SRY）がこの中間中胚葉に発現して、性腺原器が精巣として分化を始めるが、この性決定遺伝子(SRY)が存在しなければ性腺原器は卵巣として成長し続ける。性腺が確立されると、それに引き続いて、その男女の性腺でそれぞれの性ホルモンが産生されるようになる。これによって出生前の性分化の最終段階、即ち、性腺以外の組織の性分化、性成熟が完成されるのである(Amano, 2006)。

第二に、脳科学の観点からみると、Gorski らは視床下部における機能的な性差は、脳の構造の性差に関与しているということを示唆した(Gorski et. al., 1980; Allen et. al.,1989)。特に、間脳を中心とした広義の脳幹においては、個々

の神経核の構造が男女間で異なり、性二型性を示すのである。Y 染色体を持つ男性胎児の精巣から分泌されるテストステロンは、脳幹の性腺ステロイドホルモン感受性細胞に働き、その形成作用によって本来は女性型の脳を男性型に変え、結果として男女で異なる大きさの性的二型性神経核(sexually dimorphic nucleus; SDN)ができる。また、成熟後に再び男性で分泌されるアンドロゲンは男性型の神経核を刺激し、女性で分泌されるエストロゲンは女性型の神経核を刺激してそれぞれの機能を発揮させる。

一方、大脳皮質では、男女における思考と行動の差を生じさせている。脳幹では構造的な性分化の結果、男性はテストステロンにだけ、女性はエストロゲンにだけ反応するという構造とホルモンの関係が成立しているが、大脳皮質には脳幹のように構造的な性的二型性が存在しない。しかし、それにもかかわらず、これらのホルモンは大脳皮質に対し、脳幹と同じように効果を及ぼすということがしばしば見られるのである。例えば、認知機能は新皮質と海馬が担う機能であるが、エストロゲンは女性の認知機能を強く促進することが広く認められている（Stahl, 2001)。

従って、性染色体によって形状面における性別がまず決定されるが、特に脳の性分化が引き起こされ、ホルモンの刺激によって、性相面を中心とした機能的な性差も現れてくるのである。それでは、この性差が現れることによってどのような意味が生じるのであろうか？これを明らかにするために、まず生物の創造過程を振り返ってみたいと思う。

すべての万物や生物は、神の陽性・陰性の二性性相を反映しているが、生物は約 38 億年前に誕生したと考えられている。そのころは染色体を１組もつ一倍体細胞生物しか存在していなかった。一倍体細胞生物は分裂により増殖するため、基本的に死は存在しない。ところが 20 億～15 億年前になると、染色体を２組もつ二倍体細胞生物が登場した。二倍体細胞生物は大きく２種類の細胞から構成されている。一つは生物の体を作っている「体細胞」、もう一つは遺伝子を子孫に伝えていく「生殖細胞」である。

田沼の研究によれば、体細胞はさらに、血液や皮膚の細胞のように新しく置き換えられる「再生系」の細胞と、神経や心臓の細胞のように置き換え不能で長く生き続ける「非再生系」の細胞とに分けられるという。いずれの体細胞も永遠に生き続けることはできず、ある時期になると「死」の遺伝子にスイッチが入り「死」に至る。また生殖細胞においても「死」が存在し、結局、二倍体細胞生物を構成する細胞には、すべて「死」がプログラムされているという(Tanuma, 1997)。つまり、有性生殖の生物が誕生したときに「死」が誕生したのである。これを彼は「死の起源」と呼んでいるが、「死」は、有性生殖を行う生物だけにみられるものなのである(Tanuma, 2000)。それではなぜ、「性」のあ

るところに「死」が必要だったのだろうか？

生物の繁殖という点について言えば、無性生殖の方がはるかに有利である。例えば、大腸菌のような一倍体細胞生物は、１個の細胞が１つの個体を形成しており、増殖のシステムは個体の中にある１組の遺伝子が２倍になり、分裂・増殖していくのである。もちろん、不慮の事故による壊死（ネクローシス）で死ぬ個体もあるが、この無性生殖では無限に増殖できることから、無性生殖における一倍体細胞生物には、基本的に「死」は存在しないと言える。しかし有性生殖においては「死」が存在する。

ここで、有性生殖における重要な特徴を考えてみたい。第一は、卵子や精子などの生殖細胞は減数分裂によって染色体の組み換えが起こるという点であり、常に新たな遺伝子の組み合わせができるため、同じ個体が二度と作られないことである。言い換えると、受精というシステムを経ることによって、親とは違った新しい遺伝子の組み合わせを持った子供が生まれるが、しかもその子供は、唯一無二の存在となる。そして、受精卵に異常があれば、発生の途中で自然淘汰されてしまうが、これは種の保存のために「死」のプログラムが働き、種にとって不利な突然変異を「死」が未然に防いでくれることを示しているのである。これは、種の区別は厳格であり、絶対的であるということを意味している。

しかし、有性生殖においてより重要である第二の特徴は、必ず一組のペアによってなされるという点であり、第三者の介入を許さないことである。言い換えれば、有性生殖にはペア・システムにおける授受作用、つまり「愛の力」が存在し、その「愛の力」を通してのみ繁殖が可能なのである。このことは、有性生殖における種の保存・繁殖という点において、「死の起源」以前にすでに、「愛の力」が存在していたということを意味しているのである。それでは、人間において「性」と「死」が真に意味することは何であろうか？

人間にとって人生の目的は愛を完成することにあるので、「性」の目的も正に愛の完成にあるのではないかと思われる。そして本来、人間は愛を完成したのちに「死」を迎え、永遠の世界である「霊界」へと入っていくようになっている。

本論の最後に、人間における「性」の完成、夫婦の完成について、医学的見地および統一思想の観点からさらに考察してみたい。その主眼点は、男性と女性の調和についてである。

統一思想によると、陽性と陰性は性相と形状の属性であるが、人間における陽陰の調和とは夫婦の調和のことを言う(UT, p.95)。しかし、人類堕落の結果、夫婦間の諸問題、とりわけ不倫や性的虐待、性障害や離婚問題などが氾濫する世の中になってしまったのである。そして今まで「性」に関する多くの研究が

行われてきた。特に女性「性」に関わるテーマとして、例えば結婚、妊娠、分娩、産褥、更年期などを中心に数々の研究が精力的になされてきたのである(Suzuki et. al., 1994 ; Dennerstein, 2002: 2006)。

しかし、ある研究者たちによって、「性」に関する諸問題の解決策として、「セクシュアル・ライツ（性の権利）」(1999)という誤った認識が現れてきた。その背景には、歴史的な流れを汲む「性の差別」という意識がある。そして差別からの開放という欲求が、フリーセックスやジェンダーフリーといった思想を生み出していったのであろう。しかし、その思想には、「性」の完成、夫婦の完成という視点が欠如しているために、「性」の権利をどんなに主張し実践したところで、真の夫婦の喜びを実感できる道理はなく、その結果、真の問題解決には至っていないのが現状である。しかしながら、これらの問題に対して統一思想は明瞭な答えを与えている(UT, p95-97)。

まず第一に、本然の夫婦はそれぞれ神の二性性相中の一性を代表する存在であり、従って夫婦の結合は神の顕現を意味するのである。夫婦が神を中心として愛し合うとき、神の愛を縦の軸として、その軸を中心として夫婦が横的に愛し合いながら回転運動を行うのであり、そのようにして神の愛が夫婦に臨在するのである。

第二に、本然の夫婦はそれぞれ宇宙の半分を代表する存在であり、従って夫婦の結合は宇宙創造の完了を意味する。アダム・エバが堕落しなければ、アダム・エバの完成とともに宇宙の創造は完了したはずであった。宇宙創造の最終的な目標は、宇宙万物の主管主である人間の完成であったからである。言い換えれば、人間は万物の主管主として造られたが、男一人では、あるいは女一人では、主管主となることはできないのである。夫婦として完成して、初めて人間は万物の主管主となる。そしてその時、宇宙創造が完了するのである。

第三に、本然の夫婦はそれぞれ人類の半分を代表する存在であり、従って夫婦の結合は人類の統一を意味する。即ち、夫婦においては、夫は全人類の男性を代表しており、妻は全人類の女性を代表しているのである。

第四に、本然の夫婦はそれぞれ家庭の半分を代表する存在であり、従って夫婦の結合は家庭の完成を意味する。即ち、夫は家庭におけるすべての男性を代表し、妻はすべての女性を代表しているのである。

以上の立場から見ると、夫が妻を愛し、妻が夫を愛するということは、家庭において人類愛を完成することを意味し、また夫婦が宇宙の中心となることを意味する。夫婦の結合は、実に神聖にして尊い結合なのである。

さらにここで、最も重要なキー・ポイントを挙げておかなければならない。それは、生殖器の主人は誰なのか、という点である。

レバレント・ムーンは次のように述べている。「人間は、男性も女性も独りでは半分の人間にすぎない。神様はそのようにして私たち人間を創造した。それで神様は愛の器官である生殖器の主人をお互いに取り替えた。妻の生殖器の主人は夫であり、夫の生殖器の主人は妻である。従って、お互いに『為に生きる』真の愛を中心として一つになってこそ、相対の主人の位置に立つことができるのである。言い換えれば、人間は皆、結婚を通して主人の位置を確保するときに、半分の人間ではない、完全な人間になるのである。これが絶対『性』の完成を意味するのである(Moon, 2006)。」と。

＜結論＞

この宇宙はすべてがペア・システムになっており、男性と女性の間にはお互いに引き合う目に見えない強い力が存在している。特に夫婦は、様々な人間関係の中でも「性」を介した唯一で特別な相対関係を持ち、結婚生活の満足度が高ければ高いほど引き合う力が強いことを示している。

「性」とは、神の陽性・陰性の二性性相に由来しており、男女差はまず性染色体によって形状面での性差が決められ、性分化、性成熟へと進んでいく。脳科学の観点からみると、脳の構造的な性分化によって生じた神経核にホルモンが作用して、性相面を中心とした機能的な性差を作り出している。

しかも、この性差に基づいた生殖（有性生殖）では、新たな遺伝子として「生」を更新していくために「死」が必要である。言い換えれば、種の保存のために「死」のプログラムが働くが、これは種の区別は極めて厳格であるということを意味している。さらに、ペア・システムには第三者の介入を絶対に許さない「愛の力」が存在し、その愛の門を経ることなくして新しいものが生まれることはないのである。

最後に、人間が神様に似て完成するためには、神様の創造理想のモデルとしての「性」を相続しなければならない。言い換えれば、絶対「性」の基準で完成することが必要である。それには、結婚まで守るべき絶対純潔、夫婦になってからの絶対貞節の天法によって真の夫婦となり、真の子女を生んで真の父母になることである。またこれは、無形であられる神様ご自身が有形実体世界に相対できるようになり、人間を通して霊界と地上界が連結されることを意味している。

従って、絶対「性」の完成を通して、神様の創造理想世界が創建され、真の健康が実現されるのだと思われる。

（ご清聴ありがとうございました。）

References

Allen, LS. et. al. (1989). Two Sexually Dimorphic Cell Groups in the Human Brain. The Journal of Neuroscience, February, 9 (2): 497 - 506

Amano, K. (2006). What is the Gender-specific Medicine? Obstet.& Gynecol. (Tokyo). Vol.73, No.6. 773-781. (in Japanese)

Coan, JA. et. al. (2006). Lending a Hand – Social Regulation of the Neural Response to Threat. Psychological Science. Vol17, No. 12. 1032-1039.

Dennerstein, L. (2002). Conference Report From the 10th World Congress on the Menopause. June 10 – 14: Berlin, Germany. Medscape Women's Health. 2002; 7(2). To view: http://www.medscape.com.viewarticle/437183.

Dennerstein, L. (2006). Highlights of the International Society for the Study of Women's Sexual Health Annual Meeting. March 9 – 12: Lisbon, Portugal. Medscape Ob/Gyn & Women's Health.2006; 11(1). To view: http://www.medscape.com.viewarticle/528173.

Gorski,RA. et. al. (1980). Evidence for a morphological sex difference within the medical preoptic area of the rat brain. J. Comp. Neurol. 193:529 – 539.

Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity. (1977). Divine Principle. New York: HAS-UWC.

Kiecolt-Glaser, JK.et. al. (2003). Love, Marriage, and Divorce: Newlywed's Stress Hormones Foreshadow Relationship Changes. J. of Consulting and Clinical Psychology, Vol. 71, No. 1, 176 – 188.

Luttik, Ml. et. al. (2005). Impact and Importance of social support on outcomes in patients with Heart Failure: an overview of the literature. Journal of Cardiovascular Nursing. 4: 162 – 169.

Moon, S. (2006).The True Owners in Establishing the Kingdom of Peace & Unity in Heaven and on Earth. The Third Assembly of the Mongolian People's Federation for World Peace: Addressed in the Republic of Korea. April 10.

Moon, S. (2007). God's Ideal Family: The Kingdom of the Peaceful, Ideal World. Universal Peace Federation. (in Japanese)

Suzuki, S. et. al. (1994). Sleeping patterns during pregnancy in Japanese women. J. Psychosom. Obstet. Gynecol. 15 : 19 – 26.

Stahl SM. (2001). Effects of estrogen on the central nervous system [Brainstorms]. J Clin Psychiatry. 62 : 317 - 318

Robles, TF. et. al. (2006). Positive behaviors during marital conflict: Influences on stress hormones. J. Social and Personal Relationships. Vol. 23(2): 305 – 325.

Tanuma, S. (1997). Dream of Genes. NHK books 811. (in Japanese)

Tanuma, S. (2001). The origin of Death – A question from genes. Asahi – sensho 678. (in Japanese)

Unification Thought Institute. (2005). New Essentials of Unification Thought; Head-Wing Thought. Tokyo: UTI-JAPAN.

World Association for Sexual Health. (1999). DECLARATION OF SEXUAL RIGHTS. Adopted in Hong Kong at the 14th World Congress of Sexology, August 26.